

著者・まえがき

日本で臨床研修を受けていた頃、卒後3年目あたりからこんな2つの壁を感じ始めていました。

どこで働いても恥ずかしくない臨床能力を身につけているか？ 発展途上の自分がきちんと後輩を指導できているのか？

「臨床医/指導医としての不全感」と言い換えてもよいかもしれません。不全感のせいか、外の世界の様子が気になっていました。周囲の人々は、専門科に進むとロールモデルが身近にでき守備範囲も明確になり、経験を積むにつれ不全感も解消して自信をつけていきましたが、私の進んだ総合診療や総合内科分野にはロールモデルがまだ少なく、守備範囲も曖昧だったため、若かった私はただ不安でした。

そんな中、卒後4年目にハワイ大学内科レジデンスプログラムエクスターンシップに参加する機会に恵まれました。最初のカルチャーショックは、医学生時代のイギリスでのエクスターンシップで経験し、私が救急と総合診療に定評ある研修先を選んだきっかけになったのですが、医師人生2回目のカルチャーショックはアメリカで受けました。レジデンスプログラムの熟考されたカリキュラム、充実したサポート体制、豊富な総合内科指導医、困難ながら勉強になる症例、当たり前のように受けられるフィードバックや評価、充実した講義、そして世界中から集まる熱心で優秀なレジデントに感銘を受けました。内科レジデントを修了すると、どの専門研修にも自信を持って進むことができ、総合内科医を一生のキャリアとして独立して歩むこともできます。研修のゴールや、次のステージのロードマップが揃っており、未来がひらけた思いがして臨床留学を決意しました。期待通り、留学中は手厚い医学教育システムの中で多くを学ぶことができ、後進指導時に参考にすべきモデルができました。幸運なことに、医学教育フェローシップ、医学教育修士課程、チーフレジデントと、研修プログラム運営側の要職

を経験することもでき、日本で感じていた不全感はいつしか解消していました。

本書のお話をいただき、アメリカ医学教育を学習者からみた表舞台と、指導者・運営者からみた舞台裏の両方を経験した10年の集大成にしたいと考え、快諾しました。「あめいろぐシリーズ」に共通するコンセプトを踏襲し、現場の旬の情報を読みやすく伝える「医学教育のジャーナリスト」を目指しつつ、中堅やベテランの医師にも参照していただけるようデータやエビデンスを盛り込みました。個人、組織、国レベルで、医学教育を多角的に俯瞰できたのではないかと思います。

共著者である瀧医師は、私がアメリカで内科レジデントを開始した1年目の駆け出しの頃にハワイ大学で内科チーフレジデントをされており、とてもお世話になった先生です。のちに私がチーフレジデントになった際のロールモデルでもあります。彼女がピッツバーグで集中治療フェローを終え、ハワイで同僚として働いた時には、深いご縁を感じました。アリゾナ州でコロナパンデミックを迎えた彼女の集中治療現場での苦労は想像を絶しますが、励まし合いながら本書の完成まで一緒に努力できたことは一生の思い出になりました。

熱量が高すぎて予定ページ数の超過、コロナパンデミックによる執筆の遅延といった事態にもなりましたが、辛抱強く励まし、原稿を丁寧に推敲していただいた丸善出版企画編集部の堀内志保様には深謝いたします。

「自分や家族が医療にかかる際は、できるだけよい医師にお願いしたい」。そんな気持ちは本書を手にとってくださった皆さんにも共感していただけたと思います。医学教育の改善は、全人類の健康と幸福につながる壮大なテーマです。変化の早い世の中で、医学教育の最適解を模索する1人として国境を越えて読者の皆様と繋がることができ、光栄です。

2022年4月吉日

世界平和とパンデミックの終息を願いながら
クイーンズメディカルセンターホスピタリスト
共著者代表 野木真将